

慈尊院は和歌山県伊都郡九度山町にあり、弘仁7年（816）に弘法大師が政所として伽藍を創建したのが始まりとされる。伝承によると、善通寺から訪ねてきた大師の母公が、この地に滞在し、承和2年（835）に入寂したため、大師が御廟を建てて弥勒菩薩と御母君公の霊を安置されたという。本発表では、この本尊弥勒仏坐像と同じ厨子内におさめられた四天王像について、足元に置かれる邪鬼を手がかりとしながら、彫刻史上の位置付けを改めて考察する。

慈尊院四天王像については、作風から推察される制作年代や大きさの対比から、本尊と一具と考えるのは難しく、またいつ頃から慈尊院に伝来し、本尊とともに安置されたのか明らかではない。しかしながら造形の特徴から、鎌倉復興期の東大寺大仏殿の四天王像に倣った、いわゆる大仏殿様四天王像の一例として鎌倉時代後期に制作されたと考えられている。今回、本像について調査の機会を得たことで、彩色や文様、細部の造形といった詳細が明らかとなり、足元に各一頭ずつ配される邪鬼についても概ね本体と同時期の作であることがわかった。また増長天邪鬼（伝持国天）が腕に蛇を巻きつけ、広目天邪鬼が棒状の武器（作拳の孔は当初、持物は一部後補か）を握るという特徴的な図像も当初のものであることが明らかになった。

もとより東大寺大仏殿の四天王像は、創建期と鎌倉復興期の像、いずれも邪鬼が付属していたことが知られる。そのため後者を祖型とする大仏殿様四天王諸像もまた基本的に邪鬼をともなあってあらわされるが、まず発表者は、本体と同様に邪鬼にも大仏殿様の定型を提示することができると思う。そのうえで慈尊院四天王像の邪鬼は、四頭のうち持国天邪鬼（伝増長天）は大仏殿様の基本形に倣うものの、ほかの三頭が定型とは異なる図像をあらわし、さらに増長天邪鬼（伝持国天）と広目天邪鬼が持物を握るという定型にはない特徴が加わる。邪鬼の視座から大仏殿様四天王像の作例を概観したところ、これと同じ図像が文和4年（1355）の銘のある法隆寺上堂四天王像とフリーア美術館所蔵の四天王像の邪鬼に認められた。これらは他の例にみられた定型の写し崩れとは異なり、意図的に改変が加えられたものである可能性がうかがわれた。

今回の発表では、はじめに調査結果にもとづきながら、慈尊院四天王像と邪鬼の造形的な特徴を確認する。次に大仏殿様四天王像邪鬼の定型を論証し、その定型との比較から慈尊院四天王像邪鬼の図像の改変について具体的に検討したい。そして邪鬼の図像を共有する法隆寺上堂四天王像とフリーア美術館所蔵の四天王像との比較を通して同異点を明らかにしつつ、蛇や武器という持物を握る邪鬼の図像が選択された意図についても考察をめぐらせながら、慈尊院四天王像の制作背景について考えを述べたい。